

## 鳥取県倉吉方言におけるア段長音の派生と分布について

著者	桑本 裕二
雑誌名	東北大学言語学論集
号	27
ページ	19-29
発行年	2018-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00130475">http://hdl.handle.net/10097/00130475</a>

# 鳥取県倉吉方言における ア段長音の派生と分布について\*

桑本裕二

キーワード：鳥取県方言・倉吉方言・開合音・ア段長音・ア音便

## 1. はじめに

山陰地方の諸方言に特徴的にみられる、音便もしくは連声の結果としてのア段長音については、中央語（標準語に相当するもの）に室町時代末期まで存在したといわれるオ段長音の開合の区別の一方である開音に由来するといわれている（森田 1977:274、真田 2002:118f. など）。例えば、ア／ワ行五段活用動詞連用形が、現代標準語において「買って (kaQte)」のように促音便で現れるところに、当該方言においては ka:te のようにア段長音 a: が対応している。また、動詞の活用形以外でも、現代標準語での「～しそうな (siso:na)」が sisa:na のようにやはりア段長音 a: が対応する。本研究は、当該方言におけるこれらのア段長音の出現に対し、かつての開音からの音韻変化の結果であることをふまえてその音韻派生を検討し、さらにその他の類似のア段長音との対照を行って、当該方言のア段長音の分布の多様性を指摘するものである。

なお、ここで取り上げた開音由来のア段長音は、兵庫県但馬地方、鳥取県全域（因幡地方・伯耆地方）島根県出雲地方、同隠岐地方の広範囲に及んで観察されるが（森田 1977:276）、著者が実際に行ったインフォーマント調査<sup>1)</sup>の成果を反映しているため、本研究の対象方言を鳥取県倉吉方言（鳥取県伯耆地方東部）としている。

## 2. 開合音の変化とア段長音の派生

### 2.1. 開合音について

森田 (1977:274ff.) によれば、中央語には、室町時代末期までは、オ段長音に開音／合音の別があったとされる。森田 (1977) は『日本大文典』（1604-1608、ロドリゲス）を引き、開音は「拡がる ò」、合音は「窄（すぼ）る ô」であり、開音 ò は [o:]、合音 ô は [o:] に当たると推定している。開音 ò は、au から、合音 ô は ou, eu, ouo から生じており、元々は全く別の連母音であったが、室町時代末期頃にいったん微妙な開合の区別を有し、そののち（中央語で）同一の o: に融合した。融合して開合の区別がなくなったのは江戸時代初期、京都でも元禄ごろとされる。オ段長音は、これ以降は特段の音変化を経ずに現代標準語に至る。

例えば、開音の変遷については (1)、合音については (2) のような音韻変化の過程が推定できる。

(1) 開音の変遷 au → o: → o:

申す（まうす）：      mausu → mo:su → mo:su

(2) 合音の変遷 ou, ouo → o: / eu → jo:

思う（おもふ）：      omou → omo:

公（おほやけ）：     owojake → o:jake  
 今日（けふ）：     keu → kjo:

これらを時間軸に沿ってまとめると、開合音の区別・融合は、図 1 のように表すことができる。

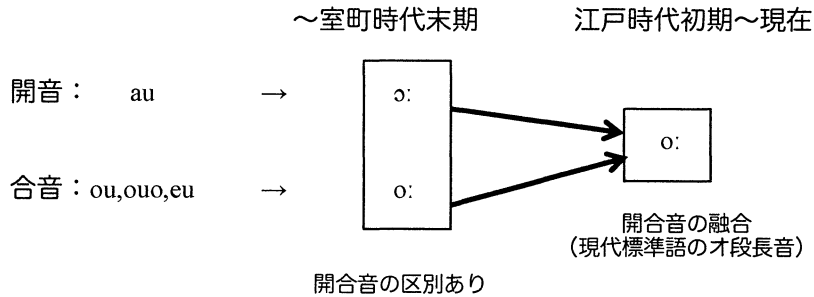


図 1 開合音の変遷

## 2.2. 倉吉方言における開合の区別の残存

倉吉方言においては、前節 (1), 図 1 などでは示されたかつての開音が、 $au \rightarrow \text{ɔ:} \rightarrow \text{o:}$  と変化する段階で  $\text{a:}$  となって現在に至り、合音の  $\text{o:}$  との対立がみられる。当該方言に次のような語例が報告されている。: の右側は中央語で起こった音韻変化を示す。

(3) 坊主     ba:zu:   bauzu → bɔ:zu → bɔ:zu (森田 1977 より)  
 書こう     kaka:    kakau → kakɔ: → kako: (真田 2002 より)

これらの語における  $\text{a:}$  の出現は、元々「あう」「あふ」と表記していたものが  $\text{ɔ:}$  を経て  $\text{o:}$  になった、標準語での音韻変化とは別に、歴史上のどこかの段階で分離して派生したものととらえることができる。変化の段階での派生の元となった段階は、図 2 で示される [I]～[III] のいずれかが考えられる。

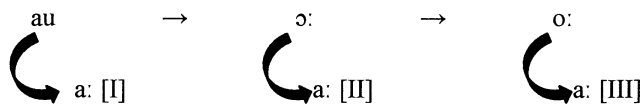


図 2  $\text{a:}$  の開音からの派生の可能性

森田 (1977)、真田 (2002) などでは、当該地方の  $\text{a:}$  が開音に由来していることには言及があるが、どのような音韻過程を経たのかについては触れられていない。本研究では  $au$  から  $u$  が脱落して代償延長が起こったと考えられる、図 2 における [I] を最も妥当な変化の過程であると仮定する。他の 2 つの音韻過程はあまりにも負担のかかる変化を考えねばならないか

らである。特に [III] の可能性は、開合の区別がなくなって単一の o: に融合してからの分離であるが、これはもっとも考えにくい音韻過程である。

#### (4) 倉吉方言のア段長音の派生の音韻的解釈

au → a<u> → a\_ (代償延長) → a:

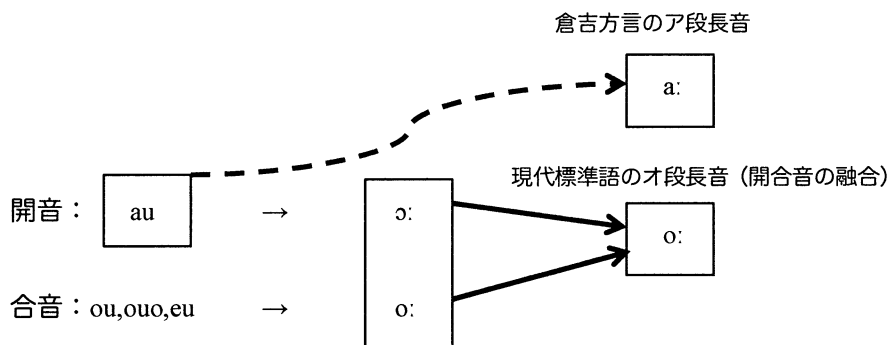


図3 倉吉方言のア段長音の派生 (仮説)

(4) の解釈は、関西方言でのいわゆるウ音便 (au → o:) と並行的にとらえることができる。

次節で、倉吉方言の a: の出現と関西方言の動詞、形容詞のウ音便形の o: とを対照させ、考察を深める。

### 3. 関西方言ウ音便との対照

ア／ワ行五段動詞連用形で、標準語で「会う (au)」から「会った (aQta)」となるところで、倉吉方言では a:ta のようにア段長音で現れる。これは、関西方言の同じ環境で o:ta などとなる、いわゆるウ音便が現れるのと並行的である。ただし、倉吉方言ではア段長音の出現の分布にはやや偏りがある。例えば倉吉方言ではア段長音は (5c, d) では現れにくく、(5e) では全く許されない。(5c, d, e) では標準語と同様に促音便が普通に用いられるが、これは標準語の影響も部分的には関わりがあると考えられる。

#### (5) ア／ワ表五段動詞連用形 + た／て

	標準語	倉吉方言	関西方言
a. 会う	aQta / aQte	a:ta / a:te	o:ta / o:te
b. 買う	kaQta / kaQte	ka:ta / ka:te	ko:ta / ko:te
c. 使う	tukaQta / tukaQte	?tuka:ta / ?tuka:te	tuko:ta / tuko:te
d. 払う	haraQta / haraQte	?hara:ta / ?hara:te	haro:ta / haro:te
e. 笑う	waraQta / waraQte	*wara:ta / *wara:te	waro:ta / waro:te

また、倉吉方言の形容詞連用形にも関西方言の「痛い」からの ito(:)naru のようなオ段長音の現れる環境で、同じく並行的に、ita(:)naru のようなア段長音が現れる。この現象の分布は、少なくとも方言主流の発話の中では網羅的である。さらに、「ない」などを除いては長

音が短音で発話されることが多いが、これは、関西方言の特徴を踏襲している。

(6) 形容詞連用形 + くて／くなる

	標準語	倉吉方言	関西方言
痛い	itakute / itakunaru	ita(:)te / ita(:)naru	ito(:)te / ito(:)naru
赤い	akakute / akakunaru	aka(:)te / aka(:)naru	ako(:)te / ako(:)naru
ない	nakute / nakunaru	na:te / na:naru	no:te / no:naru

現代標準語で、かつて「あう」と書かれ *au* と発音された開音が、*ɔ:* を経て *o:* になった変化は、高舌性の中和と考えるのが妥当である。そして、(5) (6) で例示した関西方言の *ア／ワ* 行五段動詞連用形と形容詞連用形にみられるウ音便も同じ変化をしていると考えられる。

(7) *au* → *ɔ:* → *o:* (中央語における開音の変化および関西方言のウ音便)

しかし、中央語（東京方言を母体にした現代の標準語）では、形容詞連用形にはこのような音韻変化は起こらなかった。また、*ア／ワ* 行五段動詞連用形は「会った」「買った」のような促音便として別の発展をした。関西方言では、現代標準語に起こらなかった *ア／ワ* 行五段動詞連用形および形容詞連用形での (7) の変化を補完していると解釈できる。

一方、倉吉方言の *au* → *a:* の変化は、標準語と関西方言の *au* (→ *ɔ:*) → *o:* の音韻変化のおよぶ範囲全体を網羅している。倉吉方言（同じく山陰方言、鳥取県方言）の *au* → *a:* の変化については、標準語の *o:* に対応するとの記述のある文献は多く存在するが（平山・室山 1998:41、森田 1977:275f、真田 2002:118f など）、その音韻過程の詳細に言及しているものはほとんど見当たらない。筆者は、前節図3のように、倉吉方言の *a:* は開音に由来し、その元の音形である *au* からの派生を仮定した。この変化の過程は、*au* からの *u* の脱落、先行母音 *a* の代償延長によるものと考えられる。

(8) *au* → *a<u>* (*u* の脱落) → *a\_* → *a:* (代償延長)

(8) の音韻過程を仮定することには、以下の2つの傍証的根拠がある。

1つめは、「薄い」からの *usu:naru*、「面白い」からの *omosiro:te* などの同類の活用派生に対して、(8) と同様に、後部要素 *u* の脱落、前部要素の代償延長で捉えることが可能だということである。

- (9) a. *usukunaru* → *usu<k>unaru* → *usu<u>naru* → *usu\_naru* → *usu:naru*  
 b. *omosirokute* → *omosiro<k>ute* → *omosiro<u>te* → *omosiro\_te* → *omosiro:te*

また、(9) の例は両方とも代償延長の起こらない形もあることから、(8) の過程において、最終段階の代償延長は選択的な派生とみなすこともできる。

- (10) a. *usukunaru* → *usu:naru / usunaru*  
 b. *omosirokute* → *omosiro:te / omosirote*

2つめの根拠は、同じく形容詞連用形の派生「うれしくて」に相当する *uresi:te* の派生との対照でわかることである。倉吉方言では、「うれしい」の連用形で標準語で *uresikute* に対して *uresi:te* (または *uresite*) となるが、鳥取県東部方言などでは *uresju:te* のように拗音を伴う形になる。

(11) *uresikute* : *uresi(:)te* (倉吉方言) , *uresju:te* (鳥取東部方言など)

真田 (2002) は、*uresju:te* などをウ音便ととらえ、*iu* → *ju:* という母音融合を想定している。

(12) *uresikute* → *uresi<u>ute* → *uresiute* → *uresju:te*

さらに、真田 (2002:122) は、*sju:* → *si* となるのは、直音化であると説明しているが<sup>2)</sup>、単なる直音化であれば、*uresikute* からは *uresju:te* → *ures<j>u:te* → *\*uresu:te* となるはずであるが、このような語形は存在しないので、ウ音便の拗音が直音に変化したとするよりは、*iu* からの後部要素 *u* の脱落と考える方が妥当であり、山陰の他地域のウ音便とは別の音韻過程を経たものと解釈するのが妥当である。

(13) *uresikute* → *uresiute* → *uresju:te* (鳥取東部方言など)  
       ↳ *uresi<u>ute* → *uresi\_te* → *uresite / uresi:te* (倉吉方言)

#### 4. 倉吉方言のア音便以外のア段長音の分布

第3節では、関西方言のウ音便の起こる環境で並行的に起こっているア段長音（ア音便といってもよい）について分析し、派生の過程について検討した。そもそも倉吉方言のア段長音は開音からの派生であるので（広戸 1982:19、森田 1977:276）、現代標準語の *o:* と発音される長母音のうち、かつて「あう」「あふ」などかな表記されたものはすべて網羅的に含まれる。平山・室山 (1998:41)、真田 (2002:120) には次のような例があがっている。

(14)<sup>3)</sup> *ka:na* (かーな)           「このような」  
       *dara:* (だらー)           「だろう (助動詞)」  
       *kaka:* (かかー)           「書こう」

筆者が行った調査に基づくと、このようなア段長音の分布にはある程度の制約が存在する。例えば、(14) であがっている例はみな大和ことばであるが、特に日常語彙の漢語の場合、「様」*jo:* (標準語) : *ja:* (倉吉方言) のような出現はほとんどない (15b,c)。「面倒」が *menda:* になるのが、2字漢語ではほとんど唯一の例外である (15a)。「様」は *ja:* になるが、「模様」は *moja:* にはならない (15d)。

(15) a. 面倒 (めんだう)   *menda:*  
       b. 太陽 (たいやう)   *\*taija:*  
       c. 双方 (さうほう)   *\*sa:ha:*

d. 模様（もやう） \*moja: ( ) は旧仮名遣い

また、標準語の「こう」「そう」という副詞は、それぞれ ka:, sa: が対応しているが、かならずしも標準語の語の結合に全く準じているわけではない。たとえば「こう」「そう」が単独で用いられて \*ka:, \*sa: とはならない (16a)。通常は「このように」「そのように」に相当する ka:nin, sa:nin という形をとる (16b)。または「このような」「そのような」に相当する ka:na, sa:na となる（平山・室山 1998:41、(16c)）。また、標準語で自由に接続できる「こうする」「こうだ」などに相当する形 \*ka:suru, \*ka:da などという語形も存在しない (16d, e)。また、「だ」とほぼ同じ用法の「だん」という当該方言特有の語末形にも接続できない (16e)。

- (16) a. こう／そう : \*ka: / \*sa:  
 b. このように／そのように : ka:nin / sa:nin  
 c. このよう／そのよう : ka:na / sa:na  
 d. こうする／そうする : \*ka:suru / \*sa:suru  
 e. こうだ／そうだ : \*ka:da, \*ka:dan / \*sa:da, \*sa:dan

また、「どう」に対応する形の、「どのような」の意味を持つ da:na という語形が存在しうる。

- (17) da:nakoto sjaberuka (だなこと、しゃべるか) 「どんなことをしゃべるのか」

副詞の「どう」は「だう」にはさかのぼらないので、ここで扱っている倉吉方言のア段長音の派生とは関係がなく、「どう」の意味で da: になる語形は出てこないはずである。これは、ka: (「こう」に相当)、sa: (「そう」に相当) と、a: (「ああ」に相当 (変化なし)) の類推で、同じこそあどことばとして母音を揃えた結果であろう。派生が説明できない語形であるが、聞き取り調査では、多く出現した。

この種のア段長音は、(16) で示したような「こう」「そう」に対する ka:, sa: などの代名詞が出現の頻度が高いが、これらから派生的に形成されたであろう、語頭の感動詞などに豊富にみられる (18)。

- (18) a. さ、そっだーが 「そう、そうなのよ」  
 b. さいな。 「そうなんですよ」

(18) にみられる「さ」は、標準語の「さあ」ではなく、元をたどれば (16) に例示した sa: であり、このア段長音は au にさかのぼるはずであるが、もはや原形を留めないほどに形骸化してしまい、日常的に使用されている。

## 5. その他のア段長音の出現

### 5.0.

倉吉方言には、第3節、第4節で扱った、開音 au に由来するア段長音 a: とは別の音韻変

化の過程を経たと思われるア段長音がいくつかみられる。本節では4種類のア段長音について音韻過程を考察する。

### 5.1. 「ん」(N) の脱落と代償延長

倉吉方言で、動詞未然形に打ち消しの助動詞「ん(N)」(「ぬ」からの派生形)が連なるとき、例えば「行かなくてもよい」の意味は *ikandemoe*: (いかんでもえー) となるが、これから「ん(N)」が脱落して先行母音 *a* が代償延長した *ika<sub>a</sub>demoe*: (いかーでもえー) が派生する。

#### (19) 行かんでも → 行かーでも

*ikandemo* → *ika<sub>N</sub>demo* → *ika\_demo* → *ika:demo*

これは、ア／ワ行五段動詞に限らず、また未然形に関わるので、第3節の *ka:ta* (かーた(買ーた)) などとは関係のない派生である。「買う」の場合は、「未然形 + ん + でも」は *kawandemo* → *kawa:demo* となり、連用形の場合の *ka:te* とはア段長音の出現する位置は異なる。また、N の脱落によって先行母音の代償延長が起こるかどうかは語彙によって決まっており、どちらかの語形しか許されない。

#### (20) 動詞未然形 + ん + でも の派生

買う	<i>kawandemo</i> → <i>kawa:demo</i> / * <i>kawademo</i>
待つ	<i>matandemo</i> → * <i>mata:demo</i> / <i>matademo</i>

なお、この現象は、全ての活用形の動詞、つまり未然形の語幹末がア段以外の母音の場合にも起こるので、優先的にア段長音を出現させる派生であるとはいえない。また、その場合でも代償延長の有無はどちらか一方である。

(21) 見る	<i>mi:demo</i> / * <i>midemo</i>
掛ける	* <i>kake:demo</i> / <i>kakedemo</i>
する(為る)	<i>se:demo</i> / * <i>sedemo</i> <sup>4)</sup>

### 5.2. 動詞仮定形の派生形

倉吉方言で、動詞の仮定形に関わる表現で、例えば、「行けばいい」という意味で、*ikja:e*: といい、この場合にもア段長音が現れる。(22) のように、全ての動詞活用形で見られ、*eba* → *ja*: という音韻過程が考えられる。

(22) - <i>ebai</i> : :	- <i>ja:e</i> :	
行く(五段動詞)	<i>ikebai</i> : :	<i>ikja:e</i> :
着る(上一段動詞)	<i>kirebai</i> : :	<i>kirja:e</i> :
つける(下一段動詞)	<i>tukerebai</i> : :	<i>tukerja:e</i> :
くる(来る)(カ変動詞)	<i>kurebai</i> : :	<i>kurja:e</i> :
する(為る)(サ変動詞)	<i>surebai</i> : :	<i>surja:e</i> :



eba → ja: の音韻過程については、(23) で示すように、b の脱落、母音融合が考えられる。また、ja: → a: の直音化もみられることから、真田 (2002:122) が指摘している、出雲、伯耆地方における拗音の直音化も反映されていることになる。なお、派生の末尾の直音化は、拗音のものと、同一話者の中でも共存している。

- (23) eba → ea (脱落 → ja: (母音融合、拗音化) → a: (直音化)  
ikeba → ikeɤa → ikea → ikja: → ika: 「行けば」

### 5.3. 動詞連体形の派生形

前節のア段長音出現と類似したものとして、「行く」に対して ikja:sen / ika:sen がある。これは、「行くということはない」といった意味の表現で、「行かない」よりも勿体ぶった、否定が強調された表現ともいえる。標準語の対応する語形は「行きはしない」である。標準語と倉吉方言で、「しない」—「せん」の対応が成り立つとして、前半の「行きは」—「行きゃー」の対応を考える際、(24) のような音韻対応が考えられる。

- (24) 標準語                      倉吉方言  
ikiɤwa                      :                      ikja:

標準語の w を無視すると（脱落とみなす）、標準語の母音連続 ia が倉吉方言で拗音化した ja: と対応していることになる。ja: が a: で出てくるのは、真田 (2002:122) の指摘する、当該方言の拗音の直音化である。

しかし、倉吉方言の五段動詞以外の同種の派生は次のようになる。

- (25) a. 着る（上一段動詞）                      kirja:sen / kira:sen  
b. 怠ける（下一段動詞）                      namakerjasen / namakerasen  
c. 来る（カ変動詞）                      kurjasen / kurasen  
d. する（為る）（サ変動詞）                      surja:sen / sura:sen

標準語の例からすると、「行きはしない」の「行き」は連用形である。そして、(25) の諸例に対応する形もそれぞれ「着はしない」「怠けはしない」「来はしない」「しはしない<sup>5)</sup>」と、連用形に「-はしない」が接続して成り立っている。(25) をみるかぎり、「倉吉方言の五段動詞以外の諸形 + a:sen」は、動詞は連用形が元になっていない。もし、標準語の「動詞連用形 + はしない」に対応する形に忠実にしたがうならば、(25) の例は、それぞれ (26) のように派生することになってしまう。

- (26) a. 着る（上一段動詞）                      \*kja:sen / \*ka:sen  
b. 怠ける（下一段動詞）                      \*namakjasen / \*namakasen  
c. 来る（カ変動詞）                      \*kjasen / \*kasen  
d. する（為る）（サ変動詞）                      \*sja:sen / \*sa:sen

または、(25) の諸例に対し、「着る」に対し \*kiri-、「怠ける」に対し \*namakeri-、「来る」に対し \*kuri-、「する（為る）」に対し \*suri- という特殊な連用形を設定する必要が生じる。このような連用形を設定するのが妥当だとみなせるような他の現象も存在しないことから、この解釈はむしろ冗長である。

ここで、倉吉方言の場合にだけ、動詞の他の活用形が対応していると仮定してみる。(25) の諸例を観察するに、全ての動詞形に r が含まれている。五段動詞以外で単一の活用形に全て r が含まれる活用形は終止形、連体形、仮定形であるが、これらのうちもっとも妥当と思われるのは連体形である。これに従って倉吉方言の -(j)a:seN のつく語形を推測すると、元の形と思われるものからは次のように派生していることになる。

(27) 行く iku-wa-sen → ikja:sen

ikuwasen (動詞連体形+はせん) → iku(w)asen → (w の脱落) → ikuasen  
→ (ua の母音融合) → ikja:sen → (直音化) → ika:sen

この派生では、ua → ja というやや無理のある音韻過程を考慮しなければならない。u の円唇性を考慮すれば、派生する形は j ではなく w でなければならない。ここでは、u の高舌性のみに注目し、派生がなされたとしておくが、将来的にはさらに検討する必要がある問題である。他の動詞形の場合も同じく正しい形が派生する様子がわかる。(28) に派生の様子を示す(直音化は省略)。

(28) a. 着る kiruwasen → kiru(w)asen → kiruasen → kirja:sen  
b. 怠ける namakeruwasen → namakeru(w)asen → namakeruasen → namakerjasen  
c. 来る kuruwasen → kuru(w)asen → kuruasen → kurjasen  
d. する（為る） suruwasen → suru(w)asen → suruasen → surja:sen

#### 5.4. ai からの ja: の派生

倉吉方言で、ai が ja: になって出現することが顕著にみられる(森下 1999:17f、平山・室山 1998:41)。例えば (29) のような例がある。

(29) a. 痛い itai → itja: / \*ita:  
b. 眠たい nemutai → nemutja: / \*nemuta:  
c. ～みたいな mitaina → mitja:na / \*mita:na

この ai → ja: の音韻過程については、平山・室山 (1998:41) は「融合」としてしている。その根拠となるのは、鳥取市東部、岩美郡、八頭郡で [æ:] で出現することや、ja: が直音化した a: が一部<sup>9)</sup>を除いてほとんど出現しないことなどがあげられる (29a-c)。

一方、(30) の例は、上記とは異なる派生と考えられる。

(30) ai → a: / \*ja:  
ikema:de (ma: < mai) (いけまーで) 「だめだろうな」

(30) の例中、**ma:** の部分は、標準語の **mai** (まい) に由来する助動詞である。これは、(29) の諸例と違って、後部要素 **i** の脱落と先行する **a** の代償延長と解釈する。これに対応する \***mja:** のような拗音の形が存在しないことがその根拠となる。

## 6. まとめ

以上、倉吉方言のア段長音の出現について様々な事例を検証した。本稿の中心となる論点は、中央語でかつてオ段長音で区別があった開合音のうち、開音に由来するというア段長音の出現について、その音韻過程を推定することである。第3節(8)に示したように、開合音が **o:** に融合するはるか以前の **au** から後部要素 **u** の脱落、先行母音の代償延長(場合によっては選択的)によって独自の発展をしたとするのが最も妥当である。開音に由来するア段長音の出現は、中央語で起こった開合音の融合の結果、かつての **au** が **o:** に推移したとと並行的な音韻変化であり、そればかりか、関西方言で、ア／ワ行五段活用および形容詞連用形に **au** → **o:** となるウ音便が、中央語で起こらなかった音韻変化を補完しているのに対し、倉吉方言の **au** → **a:** の音韻変化は全ての環境でほとんど網羅的であるという一貫性を有している。

また、第5節では開音由来とは関係のない、いくつかの倉吉方言のア段長音について分析した。動詞の変化形だけでも、**an** → **a:** (19)、**ea** → **a:** (23)、**ua** → **a:** (27) の3種類の音韻過程の結果が考えられ、これに開音由来の **au** → **a:** を含めると、たとえば、「行く」からの同じ **ika:** という語形は、それぞれもともと異なる語形から出てきている。

- |      |                                |                     |                 |
|------|--------------------------------|---------------------|-----------------|
| (31) | <u><b>ika:</b></u>             | > <b>ikau</b>       | 「行こう」           |
|      | <u><b>ika:</b></u> <b>demo</b> | > <b>ikandemo</b>   | 「行かなくても」        |
|      | <u><b>ika:</b></u> <b>e:</b>   | > <b>ike(b)ae:</b>  | 「行けばいい」         |
|      | <u><b>ika:</b></u> <b>sen</b>  | > <b>iku(w)asen</b> | 「行くなどということはしない」 |

ア段長音の派生と分布に関してもう一つ考慮する点は、拗音—直音の対応である。真田(2002)の指摘の通り、当該方言(倉吉方言を含む出雲方言・伯耆方言を中心とした山陰方言全般)では、母音融合などによる拗音の出現と、そこからの直音化、またはその逆の形成がある。5.4. 節で扱った現象のうち、**ai** → **ja:** (/ \***a:** /) の変化は、いったん **æ:** (またはそれに近い音) に融合した後拗音になったと考える。そこからの直音化の **a:** がみられないからである。一方、**ai** → **a:** (/ \***ja:** /) の変化、つまり、先の例とは逆に拗音が現れないものは、後部要素 **i** の脱落、さらに可能なものに関してはその後の **a** の代償延長を考える。この例には拗音は出現しないので(～しまい: ～せまー / \*～せみゃー)、母音融合や **ai** → **ia** のような母音転換は考えにくいのである。

このように、倉吉方言のア段長音の分布をめぐることは、語の音形による区別を曖昧にさせており、当該方言の文法をやや不明瞭にさせてしまっている感がいなめない。他の音韻現象に対する分析もさらに深め、倉吉方言全体の分節音的な諸問題を包括的に探求する必要がある。現時点では、それについては今後の課題としておく。

## 注

\* 本稿は、関西音韻論研究会(PAIK) 2017年1月例会(2017年1月28日、神戸大学) およ

び第 13 回音韻論フェスタ（東京音韻論研究会（TCP）・関西音韻論研究会（PAIK）・国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト共同主催、2018 年 3 月 6 日、早稲田大学）において行った口頭発表に基づいたものである。また、本研究は JSPS 科研費 JP17K02687 の助成を受けたものである。

- 1) インフォーマント調査は 2017 年 1 月実施。インフォーマント協力者：中尾明生、舩木富美子（敬称略）。
- 2) 真田 (2002:122) の記述では、出雲地方、鳥取県西部地方特有の直音化であるとされる。
- 3) 引用文献の表記はカタカナ（本文中ひらがなに改変）。アルファベット表記は筆者の改変による。
- 4) サ変動詞の未然形は標準語の場合「ない」が連なる場合は「し-ない」だが、倉吉方言は（他の多くの西日本の方言と同じく）打ち消しの助動詞「ん」が連なるため「せ-ん」となる。
- 5) 「しはしない」という表現はやや問題があるが、「仕事しはしない」「検討しはしない」などの複合語になると若干容認度は増すように感じられる。
- 6) 森下 (1999:17) の分布図によると、鳥取県西部日野郡の一部、東部の岩美郡、八頭郡の一部だけである。

## 参考文献

- 平山輝男・室山敏昭 (1998)『日本のことばシリーズ 31 鳥取県のことば』東京：明治書院。  
広戸惇 (1982)「中国方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 8—中国・四国地方の方言—』東京：国書刊行会、1-30。  
森下喜一 (1999)『鳥取県方言辞典』鳥取：富士書店。  
森田武 (1977)「音韻の変遷 (3)」『岩波講座日本語 5 音韻』東京：岩波書店、253-280。  
真田真治 (2002)『方言の日本地図 ことばの旅』東京：講談社。

(公立鳥取環境大学 教授)  
kuwamoto@kankyo-u.ac.jp